

【研修報告】

「The 13th International Council on Women's Health Issues, Seoul」に参加して

吉 野 純 子*

はじめに

平成14年6月26日（水）から29日（土）の4日間、第13回女性の健康問題に関する国際学術集会（The 13th International Council on Women's Health Issues, Seoul）が、韓国・ソウル市の梨花女子大学看護科学部（College of Nursing Science Ewha Womans University）の協力のもと同大学を会場に開催された。この大会は、看護職を中心とした世界各国の研究者や実践者が、女性の健康に関する様々な問題や研究成果について、共に知識を共有し深める機会として毎年開催されており、今年は23カ国から参加者があった。

女性が抱える健康問題は各国の社会情勢や発展状況により様々である。しかし、グローバル化が進む現在、女性の問題に関しても国際的視野で捉え考えることは、人間の生に深く関わる看護職として重要である。筆者は、本大学植田喜久子助教授ほか4名と行った共同研究を、本大会にて発表する機会を得たので、その概要と共に国際学術集会に参加して得た知見について報告する。

筆者らが示説発表した研究概要

筆者は、本大学植田助教授ほか4名と行った共同研究を、「日本の壮年期女性の更年期に対するイメージ～ライフコース別にみて」というテーマで示説発表した。本研究は、平成12年度本学共同研究助成を受けた研究の一部であり、研究目的は、日本の壮年期女性が抱く「更年期」のイメージを、ライフコース別に明らかにすることである。研究方法は、H県H市在住の40～60歳の女性1,000人を対象とした、壮年期女性のライフスタイル指標に関する自記式質問調査票を用いた調査の中から、『『更年期』の捉え方を文章完成法を用いて記述する』項目に焦点をあてて上記のテーマに基づき分析を実施した。分析は、「家事専業型」「再就職型」「仕事継続型」の3ライフコース別に、内容分析による質的アプローチによってデータ分析を行い、記述内容のコード化、

類似したものの分類、カテゴリー化を行った。また量的な検討も行った。

結果として、有効回答数443の内訳は「家事専業型」99名（22.3%）「再就職型」265名（56.8%）「仕事継続型」79名（17.8%）であり、表1に示す8カテゴリーが導き出された。ライフコース別でのカテゴリーに顕著な差はなく、どのライフコースも「自己の体験」が最も多く、項目として特徴的な差や違いはみられなかった。「自己の体験」の中では『実感なし』や『体験後の思い』という更年期過程に関連するイメージが多かった。「人生の通過点」では、人生の自然な流れとして意識するものが多く、また「対処方法」としては『気持ちの持ち方』『前向きな意識』など“心のありよう”“気”を意識する傾向がある一方、「心理的状況」では『不安』『不

表1 更年期のイメージ

カテゴリー	総数	サブカテゴリー	数
自己の体験	134	これから来るもの	16
		現在進行中の思い	8
		体験後の思い	42
		期待	12
		気にしない・実感なし	45
		未知のもの	11
人生の通過点	71	誰もが通る通過点	63
		自然なもの	8
人生のターニングポイント	48	新たな出発・新しい自分	13
		老いに向けての節目	24
		人生の節目	6
		子育てからの開放	5
受容困難さ	13	考えたくないもの	7
		嫌なもの	6
心理的状況	59	不安	36
		不安定	7
		うつ状態	7
		不快・辛さ	8
		肯定的	1
身体的変化	30	更年期症状	19
		体質の変化	6
		女性としての終焉	5
心身への対処方法	69	気持ちの持ち方	28
		前向きな姿勢	21
		労わる	6
		知識	6
		治療	2
		健康管理	6
人生上の出来事との関連	10		

* 日本赤十字広島看護大学 yoshino@jrchen.ac.jp

安定』というマイナスイメージもみられた。また、量的な視点からみた結果、「家事専業型」は、全項目中の「心理的状況」が17.1%と、「仕事継続型」8.9%、「再就職型」13.6%に比べ高く、さらに「人生のターニングポイント」に関しても、「家事専業型」13.1%と、他のライフコースよりやや高い傾向を示した。「心理的状況」と「人生のターニングポイント」項目における「家事専業型」の割合が高く、家庭以外に定期的に活動の場をもつ者との間に違いがみられたことより、仕事の有無が更年期を捉える女性の心理に何らかの影響を与えていることが示唆された。

学術集会の概要

本大会では、ワークショップ2題、基調講演12題、口演176題、示説92題が開催された。筆者が発表した示説は、吹き抜けの明るいホールに、午前・午後の発表に合わせて貼り出し、参加者が自由に内容を吟味できる雰囲気になっていた。発表内容は、いろいろな発達段階の女性を対象とした各国の健康問題が論じられており、ポスターにも各国の特徴、地域性を意識して創意工夫されたものが多く、視覚的にも参加者の関心をひいていた。口演は、類似したテーマを1セッション3～4題で組み、小さな教室でマイクを使わずに行われた。基調講演と並行して開催されたため各セッションへの参加者は少人数で、発表者と参加者がこじんまりとした雰囲気の中で互いを身近に感じながら進められていた。中には、アロマやマッサージの効果を、発表者と参加者が一緒に体験するというユニークな試みもされていた。発表にあたっては英語の他に通訳なしの韓国語使用もあり、理解の難しい場面もあったが、発表者の熱意や真摯さを間近に感じる会場設定や雰囲気が、言語による意思疎通の困難さをカバーし、発表の理解を促す手助けをしてくれていた。基調講演は、保健医療に関わる健康問題に留まらず、行政関係者や弁護士による「倫理・法律面から考える女性の健康」など、幅広い視野・テーマから女性の健康問題が論じられていた。女性の健康が単に心身の状態の問題としてではなく、社会・経済・文化面等国家レベルでの取組みを要する国際的に共通する重要な問題であることが、各国の事情を通して理解することができた。

韓国における女性の健康問題

今大会は、韓国に関する演題が全体の約7割を占めており、韓国の女性の健康問題を深く知る機会と

なった。韓国女性が抱える主要な健康問題は、①人工流産率が高い②出生時の性のアンバランス③喫煙・アルコール問題④壮年期女性の高い有病率にも関わらず、女性の入院が少ない⑤老年期における女性のQOLが低い、の5つであった。母子健康問題に関しては、韓国の男児を好む長年の傾向が大きく影響していること、また壮年期以降の健康問題では、韓国社会における女性の特性への無配慮や地位の低さという社会の風潮が理由として挙げられていた。こうした風習・風潮は地方ほど強く根づいており、女性の医療機関へのアクセス手段や機会の欠如を含めて、改善への道が困難である現状が報告された。

リプロダクティブ・ヘルスは国際的な議題となっている。我妻(1995,p.116)は、開発途上国では高い乳幼児・母体死亡率等の母子保健に関連して、両親が一般に女兒より男児を好む傾向にある問題を指摘している。女性は出生時より家族内だけでなく地域社会において低い地位にあり、ヘルスケアシステムの恩恵を受け難い現状にある(小早川,1998)。地域社会と家族内における女性の地位やその社会の有する医療資源レベルは、女性の健康と間接的に深く関わりを持ち、女性の健康問題に取り組むうえで考慮を要する重要ファクターである。

このように、リプロダクティブ・ヘルスに関わる問題には、保健・医療のあり方だけでなく社会環境因子も大きく影響しているため、保健領域だけで解決できないものも多い。多くの講演者も女性の健康問題の解決には、国のヘルスケアシステムや女性への意識の変革が不可欠である、との提言と取組みへの熱意を述べていた。

若年層に拡大する喫煙・アルコール問題や壮年期以降のQOLの問題など、先進国に共通してみられる問題を抱える一方、開発途上国に多くみられる、昔ながらの女性への考え方を色濃く反映した健康問題も混在しているという、韓国の特徴的な女性の健康問題を知ることができた。

おわりに

筆者が大会参加のために韓国を訪れたのは、韓国中がワールドカップ開催に沸いている最中であった。大会や余暇を利用したソウル市内探索を通して、一部分ではあるが韓国文化に触れることができた。時期的なものも影響していたと思うが、市内には他国の人々を迎える開放的な雰囲気が満ち、人々や街全体に日本以上のエネルギー感とパワーが感じられた。

また大会では、梨花女子大学スタッフの流暢な英

語や温かなホスピタリティ、海外参加者と積極的に交流を持とうとする実行力と積極性に、彼らの優れた国際感覚を感じ、国際化とは海外に出向くことだけでなく、他国の人々への自らの姿勢の在り方にも反映されることを感じた。共通する問題意識を有する研究者や実践家が、様々な国の立場から情報や知識を共有化し論じ合うことのできる国際学会は、自らの視野が広がると同時に、新鮮な視点・知見から問題を捉え新たな改善への道を模索するきっかけを得る機会として、とても貴重であると考え。筆者も、今後学びを深めるためにも口演発表形式での参加を目指していきたい。

国際学術集会への参加という貴重な機会を与えて下さった本大学に深く感謝致します。

文 献

- 小早川隆敏 (1998). 国際保健医療協力入門. 東京, 国際協力出版会.
- 我妻堯 (1995). 第7節 母子保健. 郡司篤晃編, テキストブック国際保健. (pp.116). 東京, 日本評論社.